

序

－本書とEBM (Evidence-Based Medicine)－

“Evidence based medicine is the conscientious, explicit and judicious use of current best evidence in making decisions about the care of individual patients. The practice of evidence based medicine means integrating individual clinical expertise with the best available external clinical evidence from systematic research.” [Sackett, D. L. et al.: Evidence based medicine : what it is and what it isn't. Br. Med. J., 312 (7023) : 71-72, 1996]

これは約15年前にSackett氏がEBMについて明確にした一文である。診療におけるEBMの重要性が言われるようになって久しいが、その意味するところも大分理解されてきたように思う。EBMとは、上記でSackettの言うように、大規模臨床試験やメタ解析などから得られた証拠（エビデンス）を理解したうえで、さらに個々の医師の経験を生かして診療を行うということである。

この「患者抄録で究める 循環器病シリーズ」はまさにEBMを実践するためにつくられたと言ってよいだろう。循環器疾患、特に高血圧は、患者数が多く、新薬も次々と出ていることから、多くの大規模臨床試験が行われており、そのエビデンスに基づいて治療ガイドラインも本年改訂された。本書においては、種々の高血圧について、単に特徴、治療法ばかりでなく、エビデンスとして一部の重要な大規模臨床試験を示し、さらにより実践的な一種の「経験」を積んでいただくために、実際の症例を提示した。本書の「患者抄録」は、専門医試験に役立つばかりでなく、実際の診療における考察の仕方を学ぶうえにも有用であろう。

本書が、高血圧診療のEBMの実践に役立てば、編者として望外の慶びである。

2009年9月

小室一成